私の天神町

井上 玄生 *Tsuneo INOUE*
福岡市中央区

「天神町」（てんじんのちょう）は、昭和40年ごろの町名改正で、『天神』（てんじん）と天神様を呼び捨てにするけしからぬ町名になってしまったが、その天神のなかにまだ天神町が残っている。天神界隈が変貌を遂げていくなかで、交差点にある「岩田屋百貨店」（本館）がそれである。昭和11年10月に完成・開業した岩田屋は、戦後、階を一層積み上げたり、地下鉄出入口ができたり、外装を変えたりはしたが、当時は珍しかったであろう北側から東側へかけての外壁の緩やかな弧線、その弧線に沿ったショウ・ウインドウ、西鉄福岡駅コンコース部分の天井や柱、淡いクリーム色の外壁色（戦争末期は白黒まだらの迷彩塗装が施された記憶はあるが…）などは完成当時の形状を色濃く現在も残している。

当時の天神町界隈には、いまはもう役目を終えて姿を消していった旧東邦電力ビル、旧NHK福岡放送局、旧福岡市役所、旧西日本新聞社、旧松屋百貨店等のコンクリート造りの建物があったが、いずれも灰色がかっていかめしくて威厳を感じさせた。そんな中で岩田屋が流麗なモダンさとたおやかさを見せながら交差点に屹立する姿は、デパートの建物であるということを超越して福岡市民の共有物であると錯覚するくらいの親近感を感じさせて、都心の顔として60数年存在し続けてきた。

その岩田屋もあと数年で現在地からNHK福岡放送局跡地へ移転することが決まっている。建物自体は現状のまま残るのかどうか知る由もないが、北側正面玄関上の岩田屋の浮文字がなくなり、天神の他の百貨店のようにアルファベット書きでない西鉄福岡駅コンコース東出入口の袖看板がはずされ、ショウ・ウインドウが閉ざされたとき、天神町がまた遠のいていくであろうことを岩田屋を見あげるたびに私は予感している。

変わりゆく都心の中で、市民に親しまれてきた思い出がなくなる事への感慨を、岩田屋の建物が担ってきた時代的役割を描くことによってうまく表しており、その時代を知る者に共感を呼び起こさせてくれる。

（選考委員 高 泰久）